

## 漢字関連文字とは

■漢字の周辺にあって漢字と何らかの関連を持つ文字群を“漢字関連文字”と呼ぶことにする。漢字は古来東アジアの文化を支える柱であり、その周辺には文字を持たない民族や、すでに文字を持った民族がいた。諸民族は柱たる漢字に近づき、その漢字との接触の過程で、漢字に由来する文字や漢字と関連のある文字を使用するようになった。すでに文字を使用していた民族であっても、漢字から何らかの影響を受けたものがある。さらには、逆に漢字に何らかの影響を与えたものもある。

そこで、漢字の周辺にあって互いに影響を与え合った文字群を漢字関連文字という枠組みに収めて分類すると図2のようになる。

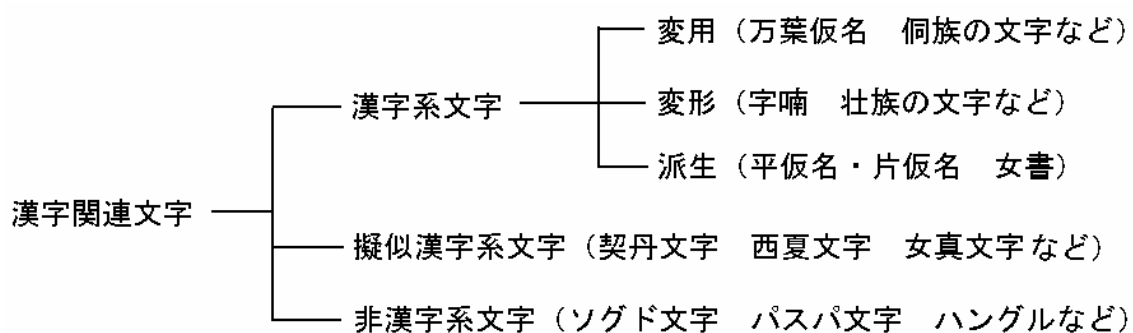


図2

注意：なお、派生に「女書」をあげた。これは中国語の方言を記したものであるから、ここでいう変用文字とするわけにいかない。しかし、派生がどのように起こるかを考える際に参考になるため取り上げることにする。

## ■漢字系文字

漢字はもともと中国語を表記するためのものであって、周辺の民族の言語を表記するためのものではなかった。しかしながら、漢字が備える字形・字音・字義を利用したり変形したりすることによって、周辺の諸民族が自らの言語を表記する場合がある。このような文字を漢字系文字とよぶ。

漢字を利用したり変形したりする方法として、“変用”、“変形”、“派生”の3種をもうけると便利であり、この3種によってできた文字を、変用文字、変形文字、派生文字と呼ぶことにする。なお、この3種の用語と用法は西田龍雄先生の『アジア古代文字の解説』（中央公論新社。2002年）によるが、やや古代文字資料館風に変えて用いることにする。

変用文字：周辺民族が自らの言語を表記するために、既存の漢字の字形と字音を利用したもの（仮借）、および字形と字義を利用したもの（訓読）。

変形文字：周辺民族が自らの言語を表記するために、漢字の要素を組み換えたり、漢字の筆画を増減したりして作ったもの。

派生文字：周辺民族が自らの言語を表記するために、漢字の字形を変えて作ったもの。

### ■擬似漢字系文字

10 世紀から 12 世紀にかけて東アジアの北側の地域で、国定の文字が次々に作られた。遼の契丹文字、西夏の西夏文字、金の女真文字、それから元のパスパ文字である。このうち、契丹文字と西夏文字と女真文字は漢字に似せて作られた部分があることから擬似漢字系文字と称さる。契丹文字は解読半ばの文字であるが、西夏文字と女真文字はほぼ解読されている。

遼・西夏・金の文字以外にも擬似漢字系文字の枠組みに入れておくと便利な文字がある。それは、中国貴州省のスイ族のスイ文字と中国雲南省のリス族のリス文字である。こちらは最近まで使用されていた文字であり解読の必要はない。

### ■非漢字系文字

非漢字系の漢字関連文字は、漢字とは文字の系統を異にするが、文字組織のいずれかに於いて、漢字の影響を受けたり逆に漢字に何らかの影響を与えたりした文字である。

参考文献〈発行年順〉

西田龍雄 2002. 『アジア古代文字の解読』, 東京: 中央公論新社。もと『アジアの未解読文字』, 東京: 大修館書店, 1982 年。

吉池孝一 2006. 「中国周辺の漢字関連文字について」, 『KOTONOHA』48 号:23-27 頁。

(文責: 吉池孝一)